

五十年來の心の友として

太田 誠三郎

昭和五十三年一月九日の早朝、小閑を得て、当時の福田総裁の下で、従來の経緯を外にその責務に徹して黙々と党務に精勵していた大平幹事長の私邸を訪れた。

開口一番、「太田君、まだ社長をやっておるのか」という。

何を聞かんとしての言葉かと戸惑い、いささかひるんだものの、「残念ながら後継者づくりが十分でなく、今そのことで忙殺されているよ。お互いにぼつぼつ人生の幕引きのことを考える齡にもなつたし、私なりに考えてはいる。ところで君自身、俗塵にまみれてどんなことを心に描いているのかねえ」と切り返してみた。

「俺もなあ、思わざる道に入り、幸いいろいろなことさせてもらつたよ。これからあとやるべきことは、一つしかないと思つ。そのやるべきことも、ぜひにも自分で求めてやることじゃない。皆さんに『やれ』と推されてやることで、『やるな』とおっしゃるのであればやめるよ。でもその時は、ある先輩のように老いの鼻水をたらしながら、うろつろつと老醜をさらすようなことはしたくない。やれといわれるなら渾身の勇を奮つて、個人の利益はもちろん、党の利益に煩わされることなく存分に良いことを成し遂げたい。それには及ばぬというのなら、この機会に公職を辞したい。おかげ様で子供たちも成人したし、老後の夫婦二人で何とか食つてゆける身にもなつた。俺には今後やりたい別の道もあるので辞めたいと思つ。その二つの道の決断が、今年の末頃と考えられる。だから今年は、俺の人生で最後の決断の年だと思つている」と、日頃口数の少ない人とは思われない答えが返つて

きた。

学窓を共にし、異なる方向とはいえ多難な道を踏んできた七十年に近い人生を、せめてその引退の幕引きを間違つたことで終わらせないよう、心にかける気持には、さして変わるものではなかつた。

私には、私なりに心にかけていたものに何か教えられ、私自身の考えにも大きな誤りのなかつたことを二人の語らいで確かめ得た。「きょうはお正月で、ゆっくりと、いい話を聞かせてもらい、いいヒントと自信を与えてくれた。事の大小、行く道は違つても、余生を大切にして行こうよ」。まことに心温まる会話であつた。

やがて同年末には、衆望を担つて宰相の地位につき、多年培つた最善の方策を成し遂げるため、羨望や誤解の渦巻く複雑な政界にあつて、渾身の勇を奮い全力を尽くした彼だったが、その果ては自らの生命を縮めて、昭和五十五年六月十二日、多彩な人生の幕を閉じたのであつた。

志半ばで世を去つたことは、まことに断腸の思いであるが、次の時代への幕開けと心中自ら慰めているのか、今は尋ねる術もない。

余生に何かを期するような、あの日の口ぶりから何を考え何を語らんとしたのか聞きもしたが、あの時、一歩踏み込んで聞いておいたらなあ、と今さら思つてみても、もはやその術はない。

老残の歩むべき道は何か。心温まる指標を示唆してくれた君の心情にただ感謝するのみ。今はただご冥福をお祈りする次第である。

(辰巳商会社長)